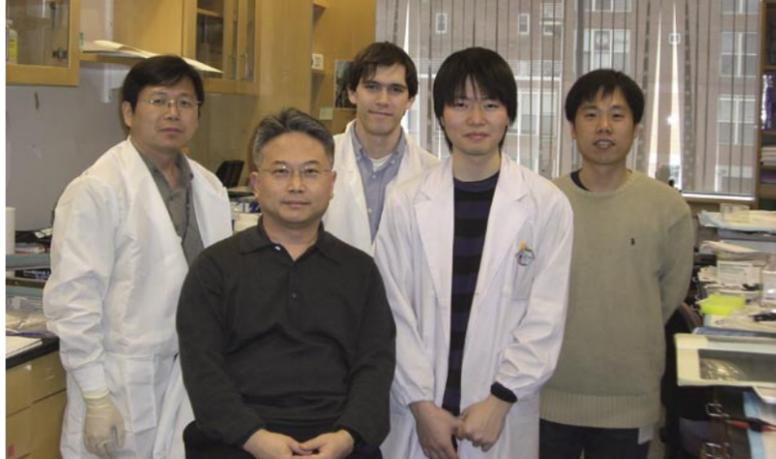




生命体科学専攻の金子聡子さんは、ヒト集団の多型データの遺伝学的解析をするために英国エジンバラ大学に留学。短い夏をめいっぱい楽しもうとする人たちが印象的だった。(先導科学研究科)



生理科学専攻の戸田知得さん(右から2人目)は、分子シグナル研究をするため、米国ベス・イスラエル・ディーコネス医療センターのキム先生(左から2人目)の研究室に留学した。(生命科学研究科)



地域化学専攻の友永雄吾さんは、豪ラ・トロブ大学に留学。メルボルン大学のウェイン・アトキンソン教授らとともにアボリジニー文化を調査した。訪れたバルマ森林でレッドガムの大木を見つけた。(文化科学研究科)



宇宙科学専攻の荻芳郎さんは、人工衛星搭載用アンテナの運動解析を行うために米国バージニア工科大学に留学。左は大学のマスコット Hokie。(物理科学研究科)

総研大の海外学生派遣事業 世界の研究者の仲間入りへ第一歩

平成18年度に始まった「海外学生派遣事業」。この事業の目的は、総研大の学生に海外生活の機会を提供し、世界に通用する研究者を育てることだ。すでに16人が派遣されており、ホームページの総研大広場では、派遣先選びや現地での生活の様子が生き生きと伝わってくるレポートを読むことができる。その中の2人に、海外派遣の感想を聞いてみた。

今後の研究につながる機関を選ぶ

文化科学研究科・比較文化化学専攻の玉山ともよさんは、現在、アメリカ先住民のウラン鉱山による被曝問題を研究中だ。その予備調査のために、この海外派遣事業を利用して、2006年4月19日から約1カ月間、アメリカのニューメキシコ大学に留学した。「文化人類学の研究はフィールドワークがどうしても必要で、特に海外調査は経済的に負担が大きい。このような援助は本当に助かりました」と玉山さん。留学先は、調査する先住民保留地に近い大きな大学という理由か

ら、ニューメキシコ大学に決めた。

一方、関数型プログラミング言語の基礎理論を研究している複合科学研究科・情報学専攻の木村大輔さんは、2006年8月15日から1カ月間、イギリスのエジンバラ大学に留学。「エジンバラ大学のワドラー教授は、私の研究分野における第一人者です。海外派遣の話が出るまえから、ワドラー教授の研究には興味があって、関連研究を行っていました」と、留学先選びで迷うことはなかった。

それぞれの海外派遣

総研大から経済的援助は受けるが、そ

のほか渡航、滞在に必要なことは、自分でやるのが、この事業の売りだ。受け入れ先と交渉し、住む家も自分で探さなければならない。大変だが、こうした経験が、世界を舞台に活躍していく研究者には必要なノウハウだ。それだけに、それぞれの経験が将来の糧になる。

「夫が農業をやっている忙しく、子供たちを置いていくわけにはいかなかったんです」。玉山さんは、幼い2人の子供を連れて渡米した。ぐずる子供に授乳しながら聞き取り調査することもあったが、現地の人に助けられて何とかやってこられたという。「子連れ調査がどれほど大

変か。それでもあきらめないで最後の1つの可能性までとことん突き詰めた時、道が開けてくるように思います」と玉山さん。「子供たちの存在は、知らない土地で行動を起こす勇気を与えてくれました」とも。

一方、木村さんはこれまで、ワドラー教授が2005年の国際学会で発表した論文の未解決問題に取り組んできた。留学中は、木村さんが導き出した答えについて、週に1、2回、ワドラー教授とディスカッションする時間をもつことができた。「海外の著名な研究者の下に長期間滞在し、議論を交す機会はそうそうないでしょう。本当に貴重なチャンスでした」と振り返る。また、8月のエジンバラは、フェスティバルで大騒ぎ。忙しい研究の間には、文化を知る楽しい経験もあったようだ。木村さんにとって、この留学での経験は、研究人生のマイルストーンになっていると言う。

あとにつづく人たちに

「海外派遣は、学生にとって研究が飛躍的に伸びる絶好の機会の1つです。どんどんチャレンジしていただきたい」と玉山さん。

引込み思案で、出発前はとても不安だった木村さんも、「ほかに頼れるものがない状況では、いつしか吐もすわり、1つ1つ乗り越えることができました。文化の違いや言葉の拙さによる誤解や失敗も数多くありましたが、いまとなっては良い経験だったと思っています」と多くの人に海外派遣を利用して欲しいと話す。

若いころの苦労は…

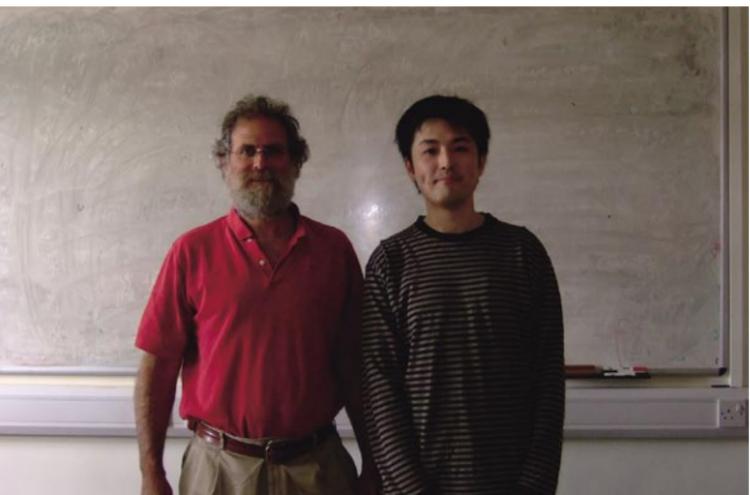
この事業では、“自分の研究と関係のある受け入れ先を選ぶ”ことになっているが、そのほか特に決められていることはない。その理由を、全学事業推進室の岩瀬峰代室長は、「総研大には、さまざま

まな分野があり、海外留学の必要を感じない研究分野もあります。しかし、国外に出てみると、本当にいろいろな研究者がいて、その中で自分の研究のポジションが見えてくる。そのために、海外にある第一線の研究室に飛び込んで行って欲しい。この事業は、あくまでも背中を押すだけですが、だからこそ、その経験は研究者としての本物の実力を養ってくれるはず」と話す。全専攻約500人の学生から、毎年11人を派遣するこの事業は学生にとって大きなチャンスだ。

帰ってきたら、それで終わりではない。留学先で知りあった研究仲間は、今後を決める大事な存在になっているようで、ほとんどの派遣学生が、今でも留学先と連絡をとりながら、研究を進めている。自らの研究を深め、新しい仲間をつくる海外学生派遣事業は総研大の新しい“武者修行”ということだ。

(取材・構成 池田亜希子)

情報学専攻の木村大輔さんは、この英国留学で、プログラミング言語論の第一人者、ワドラー教授の指導を受ける機会を得た。(複合科学研究科)



加速器科学専攻の渡邊謙さん(右)は、ドイツのDESY研究所に留学。招待されたホームパーティーで仲間たちと楽しい時間を過ごした。(高エネルギー加速器科学研究科)



比較文化化学専攻 玉山ともよさんは米国に留学。ウラン鉱山開発問題を調査するために、先住民保留地ラグナ・ブエプロを子供たちと訪れた。(文化科学研究科)



宇宙科学専攻の中宮賢樹さんは、米国ミシガン大学で、目標天体への到着軌道について研究。希望のアパートが借りられず、やっと見つけたアパート。(物理科学研究科)

